

1920年代上海における中華衛生教育会による学校衛生教育の展開

徐, 佳汝

九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7172175>

出版情報 : 教育基礎学研究. 21, pp.1-11, 2024-03-25. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



1920年代上海における中華衛生教育会による 学校衛生教育の展開

徐 佳 汝

はじめに

本研究は、1920年代上海における中華衛生教育会（以下、教育会）の活動に着目し、西洋の医療知識が中国へ導入された様相、またその導入に対する生徒や民衆側の反応を明らかにする。

近代上海の公衆衛生制度の成立に着眼した福士由紀は、衛生行政の成立の前史として、伝統社会における宣教団体による伝染病の対応を明らかにした。近代の衛生行政が成り立つ以前の上海は、教育会の本部の所在地であった¹。福士は当時の上海社会での伝染病発生時における、その流行状況とそれへの対策を検討し、個人による治病行為や慈善活動以外に、集団的な行動をとった民間団体の活動とその役割を明らかにした²。中国式の善会・善堂による医療・衛生事業の一方で19世紀以後には、医療宣教師らによる西洋医学を基礎にした診療所や病院も地域社会の衛生問題に対応する機構となっていたことが指摘されている。福士によれば、キリスト教宣教師による中国への医療宣教は、19世紀以降、イギリス東インド会社の対中国貿易の活発化と、中国へのプロテスタント宣教の活性化を背景に進められており、1830年代に入ると医療宣教師による、より本格的な医療活動が行われるようになる³。医療活動を宣教の副次的手段としてではなく、むしろ医学を通じて積極的に宣教を推進していこうという動きが出てきたと福士は指摘している。

以上のような医療宣教を推進した団体の中で、1920年代の衛生教育を担った教育会は注目を浴びていた。教育会については、その前身や成立経緯、活動の実施が多くの研究で既に解明されてきた⁴。C. ナカジマによれば、1920年代初頭に教育会は事業を開始し、チラシや小冊子など様々な衛生教育の材料を作成し、宣教師や病院に配布した他、中国のいくつかの都市で衛生知識の普及活動も実施した⁵。つまり、西洋医療についての知識や活動を提供する教育会は、伝統病流行時には治療、消毒などの措置や、大衆への衛生宣伝などの公衆衛生事業の一端を担うものであった。

教育会による衛生知識の宣伝・普及事業の一環として、学校向けの衛生教育が位置づけられていた。ナカジマや李倩倩の研究において、教育会が学校や学校衛生を重視することが明らかにされた。ナカジマは衛生宣伝という文脈で、教育会が生徒を集中的に教える学校を一つの重要な宣伝場所として見做し、生徒たちに作文を書かせることで衛生

宣伝を展開したことを指摘した⁶。李は、教育会が学校衛生を重要視し、衛生教科書の編纂や学校環境の管理などの措置を通して系統的な学校衛生を実施しようとしていた動きを明らかにした⁷。

以上の研究は、教育会の設立経緯、また教育会による学校の重視を解明した。本論文は上海における教育会の事業に着目し、『衛生季刊』を主要な史料として扱い、学校の現場において展開された学校衛生教育の実態を検討する。今までの研究に加え、学校衛生実施の根拠、即ち、「学校衛生教育は重要である」とされた理由について分析を行う。教育会による学校衛生の必要性の議論では、当時の予防医学や母親の役割という二つの視点が重要視されており、この二つの視点に基づき、学校衛生の内容が構想された。本研究は、教育会による議論や学校衛生内容の構想を通して、当時の学校衛生、さらに民衆教化をめぐる教育会の知見を明らかにする。また、先行研究で明らかにされていない学校衛生教育の展開を分析することで、教育会が衛生知識を中国にもたらした経緯のみならず、生徒や民衆の反応も解明する。本論で論じるように、西洋人の医療宣教師によって紹介された衛生知識や日常の衛生慣習などは、中国の民衆に全て受け入れられたわけではなかった。従って、学校衛生教育の実施様相を分析することで、先行研究では注目されていない、知識の導入と民衆・生徒による受容の齟齬を明らかにできる。

本研究は教育会が刊行した『衛生季刊』（1924）を史料として扱い分析を行う。『衛生季刊』の内容は主に英語で書かれているが、雑誌の後半に中国語の文章や英語投稿の翻訳版が添付されている。創刊の目的は以下のように掲載されている。

中華衛生教育会の事業を宣伝し、健康に関する情報を民衆に届ける。特に医学系の雑誌を読まれない人々にとっては、（筆者注：『衛生季刊』は）宣伝媒体の役割を担い、それと同時に、教育会の事業を実現させる寄附者との連絡を保ち続ける役割も果たしている（中略）。中国の公衆衛生状況の改善を達成するために、本雑誌は、一般民衆が関心を寄せるような健康についての情報や知識を掲載することを目指している。今まで中国において、本雑誌のような二言語で編集された定期的な公衆衛生の出版物はまだない⁸。

つまり、『衛生季刊』を創刊した目的は、中華衛生教育会の事業と医学・健康に関する知識を民衆に伝えることである。当時『衛生季刊』は唯一の「二言語で編集された定期的な公衆衛生の出版物」として、公衆衛生状況の改善には大切な宣伝媒体であった。また、読者からのフィードバックも『衛生季刊』の「読者寄稿」というコラムで示されている。例えば、以下の読者からの感想が記されている。

『衛生季刊』は役立つ雑誌であると思う。（中略）この雑誌で言及された個人の衛

生習慣養成のための日々の目標は達成しやすいし、この雑誌の内容を読みながら知らず知らずに影響を受けている。まるで芸術作品を鑑賞しているようだ⁹。

このコメントからは、『衛生季刊』が読者に愛読され、高く評価されていたことが推測できる。こうした目的に基づき、『衛生季刊』は三ヶ月毎に一号が発刊され、1928年の上海特別市衛生局の成立まで続いたが、衛生局の機関誌『衛生月刊』の改編に伴って、『衛生季刊』の発行は停止された。

本研究は『衛生季刊』を用い、まず教育会による学校衛生教育への注目を確認する。次に、当時の学校衛生事業を実施する主要な担い手としての教育会の位置づけを説明し、教育会メンバーの言説を通じて彼らが抱いた学校衛生教育の事業構想を浮き彫りにし、期待された学校衛生の様相を明らかにする。最後に教育会による学校衛生の展開を健康診断、環境整備という二つに分けて検討し、この二つの事業に対する生徒・民衆側の反応を明らかにする。

第一章 中華衛生教育会による学校衛生への着目

第一節 予防医学と人口健康という視点

教育会が正式に発足する前の1918年9月、中国の重要なキリスト教系大学の学長全員に送られた回状では、中国人の医療専門家・胡宣明¹⁰が学校衛生教育の意義を以下のように述べた。

この崇高な仕事、すなわち青少年に衛生的な生活を送るよう教育し、彼らの家族にも同じような影響を与え、将来の公衆衛生運動を支える仕事をするのは教育者である。これは極めて重要な問題であり、その解決には学校での特別な教育が最も効果的である¹¹。

この回状の趣旨は、公衆衛生教育を推進するため、教育会のような教育団体の意義を宣伝することにあつたが、そこでは教育者や教育団体の役割のみならず、学校における衛生教育の重要性も強調されていた。

教育会は人口全体の健康状況や死亡率なども考慮に入れつつ、衛生教育の展開の必要性を強調した。教育会執行委員会の委員長であり、学校衛生事業にも従事したジョン・グラント (John B. Grant) は、衛生事業を推進する理由を綴った文章において、予防医学の重要性、またそれと教育の関わりを指摘した。文章の冒頭でグラントは教育と死亡率の関係について以下のように述べた。

欧米社会における人口死亡率の低下は、健康と病気に関する知識の増加、一般教

養の普及によってこの知識が大衆に行き渡ったこと、そして経済状況が改善され、科学的医学知識を利用できるようになったこと、といった要因が相互に作用した結果である（中略）。身体を効率的に発達させる一番確実な方法は、治療医学よりもむしろ予防医学の実践である。衛生教育は時間がかかるが確実であるという信念に賛同しているため、中華衛生教育会は、予防理念に基づいた学校衛生教育を適切に推進していくことに特に関心を持っている¹²。

グラントがここで強調しているのは、人口死亡率の減少がいくつかの要因と関係があるということであるが、中でも「健康と病気に関する知識の増加」、「一般教養の普及」、「科学的医学知識の利用」などが列挙され、注目に値する。中国における人口の健康や身体状況を考察するため、教育会は教育・教養を欠かせないものとしていた。また、グラント博士のような西洋人の医療宣教師は治療より予防医学の重要性を認めていたが、そのための一つの重要な手段として学校衛生教育を挙げた。つまり、「予防」という目的を達するため、学校教育を通じた衛生知識の宣伝・普及が大切であるとされたのである。

第二節 母親役割の重要性から学校衛生教育へ

教育会が重要視していた母親役割は、学校衛生が必要とされた根拠の一つでもあった。学校衛生教育と母親への教育との結びつきについては、1918年の冬に宣教師の女性医師と看護婦の前でなされた胡の演説からわかる。

間違いなく、学校衛生教育で、教師たちが最初に教えなければならないのは、何よりも子どもの衛生管理と言えよう。私たちは、母になること以外の人生のあらゆることに備えて準備をする。私たちは、あらゆる職業の中で最も高貴な職業である母親を除いて、あらゆる種類の職業に若者を適合させている。なぜかというと、少女たちは乳幼児の世話について何も知らないまま結婚し、母親になるからだ。その結果、乳幼児死亡率が高くなるという結果になってしまうのである。この不幸な状況を改善するために、私たちは子どもの衛生について、女学生を教育しなければならない¹³。

胡によれば、学校衛生教育の内容にはまず「子どもの衛生管理」が必要である。ここにおける胡の着眼点は女子向けの衛生教育であり、その理由として当時の問題であった「高い乳幼児死亡率」と母親の責任が挙げられていた。つまり、女子学生は将来の母親として位置づけられており、衛生教育は母親としての教育と強く結びついていた。

以上のように、胡は人口の健康改善及び予防という観点を軸に、学校衛生教育の必要性を明確にした。また、胡は母親を「あらゆる職業の中で最も高貴な職業」として位置

づけ、将来の国民を育成する役割を担う母親までに衛生知識を浸透するため、まず学生、特に女子学生を対象に学校衛生教育を実施する必要性を論じた。

ここまで述べてきたように、教育会は人口全体の健康状態、疾病予防や母親、さらに民衆までに及ぶ衛生知識浸透などを理由とし、学校衛生教育の重要性を強調したのである。

第二章 中華衛生教育会による学校衛生の企画

第一節 学校衛生事業の主要な担い手としての教育会

先行研究で解明されたように、教育会は、民衆の衛生に対する関心を喚起することに尽力し、そのために当時人気だった衛生話題に関するポスターや、書籍、パンフレット、講演などの宣伝活動に熱心に従事した。しかし実は、教育会のメンバーはこれらの宣伝活動を担った教育会を、当時民衆の健康増進において行政機関と同じくらい重要な団体であると見なしていた。この観点について、アメリカの公衆衛生専門家・『衛生季刊』の編集部長ピーター博士（Dr.W.W.Peter）は以下のように説明している。

中国では、公共衛生の仕事は、他の場所と同様に、政府の役割である。しかし、ボランティアの民間団体も不可欠である。政府機関が業務を遂行するためにも、国民の協力が欠かせない。これは、国民の教育を意味する。ボランティア団体による宣伝は人々を教育する一助となる。（中略）公衆衛生分野で機能している現代的な意味での政府機関はまだ実質的にはないが、全国的にボランティアの団体を設立するための非常に大きな機会があることは間違いない。現在、団体の主要な機能の一つは、公衆衛生事業が上記のような健全な方向に向かって発展するように、教育を通じて世論を作り、可能であれば宣伝活動を通じて教育することである¹⁴。

当時の中国においては、公衆衛生の行政機関はまだ正式的に成立していなかったため、ボランティアの民間団体こそが民衆向けの衛生教育の役割を果たすことが強調されていた。公衆衛生は政府の機能であるが、世論形成のためには教育会のような民間団体も不可欠であると認められていた。

以上のように、公衆衛生の行政機関が系統化されていなかった1920年代の初頭、教育会は民間団体の教育役割を認め、民衆向けの衛生教育を重要な事業としていた。さらに、教育会は衛生教育や衛生宣伝の中でも、特に学校衛生を重視した。

第二節 教育会による学校衛生の構想

教育会は1916年に前述のピーター博士によって構想された。その後彼は胡宣明と共に都市部で衛生宣伝活動を実施するなど、徐々に教育会を形作ってきた。胡は学校衛生教

育を実施するために、助言や訓練、技術・設備を提供する団体が欠かせないと述べている¹⁵。従って、胡はこのような支援を与える教育会の重要性を強調しつつ、教育会の学校衛生部門¹⁶の事業内容を以下のように定めた。

学校衛生部の一つの主要な事業は、夏季学校を設立し、そこで教員に衛生教育のコースを提供することである。上海の場合は、二つの医学学校で、公衆衛生管理、伝染病、学校と児童衛生を内容とした教員に対する授業が行われていた。子どもの健康状況を向上させるために、学校衛生部は五つの部分からなるプログラムを打ち出した。その内容は①生徒と教員を対象とした定期的な健康診断、②各学校への調査を実施し、学校衛生環境を点検すること、③各学級のカリキュラムに体育教育、または教員の管理下の遊戯を入れること、④各学級で毎日系統的な衛生教育を行うこと、⑤師範学校や医学学校、及び他の教育機構で教員向けの衛生教授の授業を行うこと。このプログラムに加え、菌病予防法のプログラムも小学校・中学校で展開される¹⁷。

即ち、学校衛生部の主要事業は、「健康診断」、「学校環境の点検」、「体育教育」、「学校衛生教育」、「衛生教員の養成」という五つの部分で構成されている。医療行政がまだ正式に確立されていなかった1920年代、教育会は衛生宣伝と衛生教育の仕事を多く担うようになり、その中でも学校衛生は特に重要視されていた。先の引用であげられている学校衛生部の主要事業に従って、教育会はその本部の所在地であった上海、さらには全国で学校衛生を実施した。

また、前章で述べた母親役割の重視という観点と相まって、母親は衛生常識を欠乏するゆえ、家庭における応急手当や家庭看護、家庭環境の管理なども学校衛生教育の内容に編入されるべきだとされていた。胡は以下のように説明した。

赤ちゃんは成長するにつれて、よちよち歩きを始める。新しい世界への興味と好奇心でいっぱいだ。予想外のアクシデントが起こることもある。赤ちゃんは母親に応急手当を求めて泣く。もちろん母親は子を助けたいが、残念なことに母親はその方法を知らないことが多い。私は、ちょっとした怪我で長い化膿性の傷や破傷風に苦しんでいる子どもたちを見たことがある。母親が応急処置について知っていれば、このような不幸は簡単に防げただろう。従って、応急手当は教えなければならない。

家族の誰かが病気になることもある。看護の義務は女性、通常は母親か妻にある。しかし、一般の女性は看護について何も知らない。今はプロの看護師がいる。しかし、看護師を家まで呼んで病気を診てもらふ余裕のある家庭がどれほどあるだろう

か？それに、看護師の同情が母親や妻のそれと同等であるとは期待できない。家庭看護は、女子学生全員に教えなければならないもうひとつの科目なのだ。女性は病気の世話をするだけでなく、家族の健康を守る方法を知っていなければならない。これを知らないと、家族全員が感染症にかかり、死に至ることさえある。従って学校において学ぶべきなのは、感染と予防である。(中略) 私たちの健康は私たちの行動だけでなく、環境にも左右される。最も重要な環境は家庭である。それが衛生的であるかどうかは、女性の知識と訓練に大きく左右される。従って、彼女たちに家庭の衛生を教えなさい。

史料から読み取れるように、まず胡は「母親は家庭の応急処置の方法を知らない」といった知識の欠乏の問題と、「看護師を家まで呼んで病気を診てもらふ余裕がない」といった家計の問題を指摘し、この二つの問題こそは、母親の重要性をさらに浮かび上げさせ、学校衛生教育に家庭衛生や子ども衛生などの内容を入れるのは重要なこととした。また、胡は「感染と予防」や「環境の維持」などの観点を学校衛生教育にも持ち込み、学校衛生教育を通じて「予防医学」という観念を家庭までも浸透させようとした意図が窺える。

第三章 中華衛生教育会による学校衛生の展開

第一節 教育会による事業展開

①健康診断

前述したように、西洋の医療宣教師は予防医学という理念を提唱していた。教育会は学校における伝染病の発見、また生徒たちの体質向上・病気予防のために、学校における健康診断の実施を一つの予防手段として用いていた。『衛生季刊』では、健康診断の具体的な実施様相が載せられている。

上海の江蘇省立師範学校附属小学校の330名の児童は、1922年5月に健康診断を受けた。この健康診断は、中華衛生教育会に所属していたアプルトン (Dr. Vivian B. Appleton) という医者 の指導の下で行われた (中略)。アプルトンは聴診器で一人の男の子の胸部を検査している。体重計の上に立っている男子児童は体重の測りを体験しており、その結果は記録されていた。もう一人の男の子は身長 の検査を受けている。この結果はケプラー (Mr. A. R. Kepler) によって記録された。中華衛生教育会のスタッフであるチェン (Mrs. K. H. Chen) は子どもたちに歯磨きの練習をさせている。子どもの後ろに彼らの先生が立っている。先生は子どもたちと同じく歯磨きの練習に強い関心を持っている。教室の右側で、ある男の子は視力検査を受けている。壁に衛生習慣に関する掛図が掛かっている¹⁸。

以上の内容は、上海のある公立学校において教育会が健康診断を実施した様相について記述している。注目に値するのは、第一に、西洋人の医療宣教師が上海の公立学校に入って健康診断を指導することである。前章で検討したように、1920年代前半の中国では公衆衛生の行政機関は成立していなかったため、公立学校の衛生教育の進み方など、まだ政府管理の下には置かれていなかった。従って、学校衛生事業を担ったのは主に民間団体であり、ここでは教育会であった。次に注目したいのは健康診断の実施方法である。上記のエピソードで「聴診器」、「体重計」といった検査ツールが登場し、この検査は西洋医学が中心であることが明らかとなった。また、児童の身体データが記録されており、検査の結果及び身体の様子は数値化、可視化されたことが窺える。最後に、「子どもの後ろに彼らの先生が立っている」という描写から、教員も衛生に興味を持ち、良い衛生習慣を身につけようとする姿勢を読み取れる。

②環境整備

健康診断の他、教育会は学校環境の改善も一つの予防手段として見做した。『衛生季刊』の創刊号には以下のような主張が書かれている。つまり、「病んだ身体で健康な心を育成することはできないし、不潔とぞんざいに満ちた環境で清潔で素晴らしい精神生活を送ることはできないのである。私たち（筆者注：宣教師たち）は医療活動を行い、予防医学の教育を施し、不潔な都市のまさに中心部に衛生のオアシスを確立するための素晴らしい機会に気づかなかったのであろうか？」¹⁹という一段落である。ここから、清潔と身体の間接関係も読み取れる。つまり、清潔さなしには健康な身体と精神は育成できない。教育会は以上の主張を踏まえ、学校における環境整備を通して、「不衛生な児童をきれいで清潔な子に変える」²⁰ことを目指していた。1924年の7月から8月までに、教育会は上海にある小さな小学校と連携し、「夏季学校運動場」プログラムを実施した。この学校には、25名の女子児童が在籍していた。学校の環境は、以下の記述のように整えられた。

学校は、毎日充分な陽光と空気を入れるために、教室にいくつかの窓を付けておいた。床は毎日掃除されており、一つのバスルームも整っていた。運動場は大きくないが、草や花が植えられ、運動場の一方にはブランコとシーソーが設置されており、もう一方には子ども遊び用の砂のテーブルが置かれていて、雨の日にはしばしば室内に運ばれていく。設備は比較的安価である。それは全て地元の大工によって作られた。建物の床は、地面がぬかるんでいる場合には掃除する。以上の設備は、女子児童たちが小学校教育を受ける健康的、且つ楽しい環境を提供している²¹。

つまり、教育会は児童にとって健康で清潔な学校環境を作ることに工夫した。同時に、

教育会は生徒のための運動施設を設置した。この運動施設の整備から子どもたちの運動能力を強化しようとした教育会の意図も見える。この「夏季学校運動場」プログラム報告書を書いたのはバージャー (Vera Barger) という医療宣教師である。バージャーはネブラスカ大学の卒業生であった。6年間、ワシントン州とオハイオ州で現地の Y.W.C.A の仕事をしていた。1920年に彼女は中国に渡り、教育会のメンバーになり、中華キリスト教女性青年会全国協会の体育部の秘書を務めはじめた。彼女はこのプログラムについて、以下のように評価した。

この学校で行われた全てのことは、中国の全ての学校で行うことができる。設備はシンプルで、中国で購入して製造することもできる。(中略) このプログラムは、「学校」といった、中国人から高く評価され、尊敬されている施設と結びついたという点で、最大の価値があった²²。

即ち、バージャーはコスト面からも実行可能性からも、このプログラムは当時の中国の状況に適した方法だと考えた。また、学校という中国人に認められる場所で先行して実施すれば、その後の展開と普及も比較的容易であり、納得度も上がるだろうと期待していた。学校を清潔にするのは、学校衛生を重要視しているからだけではなく、当時の学校という場所そのものへの評価にも関わった。

第二節 生徒・保護者の反応

しかし、以上の学校教育事業は順調に進んだわけではなく、受容と抵抗の葛藤は存在した。国民の大半の病気の発生と予防に関する知識は、「迷信」のレベルにとどまっており、衛生教育の意味を理解していなかったようだと指摘されている²³。

例えば、前節で述べた「夏季学校運動場」プログラムに対し、「このプログラムのせいで、子どもたちが学校で遊んだばかりで漢字を学んでいない」という理由で、反対する母親もいた²⁴。つまり、当時の医療宣教師の主張や事業に対して民衆は半信半疑であり、衛生知識より漢字の勉強をより重視した。

また、さらに教育会は身体検査について説明する際、以下のように隔離の概念を強調した。

私たちは、妥当な水準の身体的健康を保てない、あるいは保とうとしない児童を学校から排除するのは当然であり、またその義務がある。授業についていけず、同時に健康も保てないような、明らかに身体的に劣っている児童は不合格にする。そのような児童たちは、より適切な病院へ送られるか、良い状態になるための指導を受け、帰宅するよう勧められる。また、他の児童の脅威となるような病気を患って

いる少年や非常に状態が悪い少年は、治療のために病院に送られ、1学期間は除外される。彼らは通常、授業についていけず、長い目で見れば、学校をやめて体調を整えるために数カ月を費やす方が時間の節約になる²⁵。

上記引用では、健康診断で発見された問題への対策としての隔離は、児童が感染症に罹患しておらず、身体的に健康であることを保証するものであり、学校の成績と強い相関関係があるとされる。しかし、「結核を理由に男子児童を除外せざるを得なくなり、学長に抗議が来た」²⁶こともあった。したがって、「隔離」という観念は完全には理解されなかったと読み取れる。

おわりに

本論文は、中華衛生教育会の学校衛生事業に注目し、それによって西洋の医療知識が中国にもたらされ、学校現場で実施された様相を明らかにした。教育会に関しては、今までの研究は主にその成立経緯と宣伝活動に注目して考察してきたが、本研究は教育会による学校衛生の構想や実施に重点を置き、当時の期待された学校衛生理想像や事業展開の根拠のみならず、西洋の衛生的知見の浸透過程における中国側の民衆の態度を解明した。予防医学や母親役割をめぐる知見に基づき、教育会は学校衛生事業を上海を中心にして展開し始めたが、学校現場で実際に事業を実施した時に懐疑や反発にも遭遇した。以上のように本研究は、学校衛生の重視だけではなく、学校衛生の構想とその根拠、学校現場での実施状況、さらにそれに対する生徒や保護者の反応を含めて、教育会による学校衛生事業の展開を分析した点で上海における学校衛生事業の着手に関する研究史に貢献したといえる。

〔注〕

1. 『衛生季刊』第一卷第一期、1924年3月、41頁
2. 福士由紀『近代上海と公衆衛生 ― 防疫の都市社会史 ― 』、御茶の水書房、2010年
3. 同上書、33～34頁
4. 中華衛生教育会の成立経緯に関しては、福士やナカジマの研究が挙げられる。福士らの研究によれば、中華衛生教育会の成立経緯は以下のようにまとめることができる：1838年、英米の複数の教団から派遣された在華医療宣教師により中国医療宣教会（The Medical Missionary Society in China）が設立された。同宣教会は、1886年中国博医会（China Medical Missionary Association）として改組される。1885年には北京で学校青年会が設立され、キリスト教青年会北アメリカ教会の幹事を務めたデイビッド・ウィラード・ライオン（David Willard Lyon）は1895年に天津でキリスト教青年会中国分会を設立した。その後、青年会の規模は着々と拡大し、1912年に中華キリスト教青年会全国協会共同会（The National Committee of the Y.M.C.A.in China）が上海で成立した。この共同会の他、前述の中華博医会、さらに1915年2月5日に成立した中華医学会（National Medical Association of China）が中国の健康教育を推進するために1916年3月上海で中華公共衛生教育連合会（Joint Council on

Public Health Education) を創立した。1920年に中華キリスト教女性青年会全国協会 (Y.W.C.A.)、中華キリスト教育会と中華看護師協会も連合会に加入して、1922年正式に中華衛生教育会 (Council on Health Education) に改称された。

5. Chieko Nakajima, *Body, Society, and Nation: The Creation of Public Health and Urban Culture in Shanghai*, Harvard University Press, 2018.
6. Chieko Nakajima, *ibid.*
7. 李倩倩「民国時期中華衛生教育会研究 (1916-1930)」、河北大学歴史専攻修士論文、2014年
8. 『衛生季刊』第一卷第一期、1924年3月
9. 『衛生季刊』第一卷第三期、1924年9月、36頁
10. 胡宣明 (1887-1965)、医学博士、中華民国公衆衛生専門家。
11. S.M.Woo, *My First Two Years with the Council (1917 to 1919)*, 『衛生季刊』第一卷第一期、1924年3月、16頁
12. John. B. Grant, *Why Hygiene*, 『衛生季刊』第一卷第二期、1924年6月、2～5頁
13. S.M.Woo、前掲論文、17頁
14. W.W.Peter, *The Place of Voluntary Agencies*, 『衛生季刊』第一卷第三期、1924年9月、5～10頁
15. 『衛生季刊』第一卷第一期、1924年3月、18頁
16. 中華衛生教育会は五つの部門に分けられている：行政総務部 (事業の計画・運営及び経費・人員管理の機能を果たす)、都市衛生部 (一般民衆の衛生状況を管理し、公衆衛生宣伝活動や展覧会の実施を担当し、地域間の援助・結合を求める)、児童衛生部 (上海の子ども健康センターと連携し、看護師たちを援助する)、編集部 (中華衛生教育会の機関誌を編集する)、学校衛生部。(前掲誌、21頁)
17. 『衛生季刊』第一卷第一期、1924年3月、17～18頁
18. 『衛生季刊』第一卷第一期、1924年3月、11頁
19. 『衛生季刊』第一卷第一期、1924年3月、7頁。ここの「素晴らしい機会」は学校衛生教育のことを指している。
20. 『衛生季刊』第一卷第四期、1924年12月、20頁
21. 同上
22. 前掲誌、22頁
23. F.J. Wampler「教会病院と公衆衛生」『衛生季刊』第一卷第一期、1924年3月、27頁
24. 同上、23頁
25. 『衛生季刊』第一卷第一期、1924年3月、4～5頁
26. 同上、6頁